

# 『聲聞地』の成立とその背景

——部派歸屬をめぐる——

デレアヌ フロリン

周知の如く、『瑜伽師地論』(Skt., *Yogācārabhūmi*; Tib., *rNal 'byor spyod pa'i sa*) は、瑜伽行派 (*Yogācāra-Vijñānavāda*) の修行道論をはじめ種々の教義を論述している文献である。漢譯で百巻にも及ぶこの膨大な論書は、佛教の百科事典という性質を有し、瑜伽行派の形成や思想體系に大きな意義を持ち、また、後のインドやチベット、東アジアの佛教にも多大な影響を及ぼしたのである<sup>(1)</sup>。『瑜伽師地論』は、中國の傳統によると、彌勒 (Maitreya) によって説かれたものとされ、チベットでは、無着 (Asaṅga) 作と伝えられている<sup>(2)</sup>。現代においても、このような説を支持する研究者がいる一方で、Frauwallner (1969, 265) や Schmithausen (1969; 1987, 13-14, 183-185; 2000) をはじめとする學者に據れば、『瑜伽師地論』は、複雑な編纂過程を経て、幾世代の著者や編纂者によって纏められたテキストなのだと言っている。實際、『瑜伽師地論』の内容や文體等の様々な要素を考證すると、後者の可能性が最も高いと思われる<sup>(3)</sup>。

拙論においては、『瑜伽師地論』の一部である『聲聞地』(Skt., *Śrāvaka-bhūmi*; Tib., *Nyan thos kyi sa*) の成立過程及びその背後に在った部派について少々検討を加えたいと思う。尚、『聲聞地』の部派歸屬の一つの手掛かりと考えられる三つの箇所を指摘し、その梵藏漢文を校訂したい。現在、『聲聞地』のサンスクリット語の完全版は、K. Shukla (1973) によるものしか無く、残念ながら、この Shukla 版 (以下、Sh) には、誤植や誤りが多く、しかも藏譯と漢譯との比較がなされていない。従って、『聲聞地』研究には、このような校訂の作業が欠かせない<sup>(4)</sup>。言うまでも無く、『聲聞地』の成立と部派歸屬の問題は、甚だ煩瑣で、容易に究明できず、ここで述べさせて戴く憶測の多くが假説の域を出ていない。

『聲聞地』は、『瑜伽師地論』の中でも最も早く成立した部分と考えられる。その内容は、主として部派佛教の修行道論及びそれに關連する教理を扱っているものである。この観点から見れば、『聲聞地』は、中國や日本で「禪經」と呼ばれている一群の典籍と同様のジャンルに屬している。實は、それらの「禪經」の中で、竺法護譯『修行道地經』<sup>(5)</sup> 及び佛陀跋陀羅譯『達磨多羅禪經』は、『瑜伽師地論』と同じと思われる題名、即ち \*Yogācārabhūmi を持っていたと伝えられている<sup>(6)</sup>。特に『修行道地經』は、『聲聞地』の先驅的な文献と考えられる。例えば、『修行道地經』に於ける凡夫と佛弟子の禪定をめぐる區別は、『聲聞地』の「世間道」(*laukikamārga*)と「出世間道」(*lokottaramārga*)を彷彿とさせるところが有る<sup>(7)</sup>。『修行道地經』が、『聲聞地』の直接の原型とは言えないが、幾つかの類似點や同様のテーマ等が共通の傳統の可能性を充分示唆していると云って良いだろう。

『聲聞地』は、恐らく説一切有部 (Sarvāstivāda) 或いは根本説一切有部 (Mūlasarvāstivāda)<sup>(8)</sup> 内部、もしくはその傘下に在った一つまたは複数の「瑜伽師」(即ち、禪定に専心する修行者)のグループによって編纂されたのではないかと考えられる<sup>(9)</sup>。『聲聞地』は、體系的に教義を論じている所も多く含んではあるが、全體としては、完璧な一貫性を貫き、整然たる構造を持っているとは云い難い。『聲聞地』には、重複する部分や繰り返し等が隨所に認められ、思想的に異なった教理さえも見られる<sup>(10)</sup>。主な教理内容や論述文體から云えば、初瑜伽處と第二瑜伽處、そして第三瑜伽處と第四瑜伽處との間には相違が有ると考えられる<sup>(11)</sup>。初瑜伽處と第二瑜伽處では、實際の修行過程や瞑想法よりも、それに直接、または間接に關連する概念や範疇が解説されたり、類別されたりしている。このアビダルマ的な序説に續き、第三瑜伽處は異なった様相を呈している。その冒頭では、瑜伽師は教えを乞う初心者にその志や特徴等を尋ね、懇切に勵まし、直接初心者に向けて具體的な教義を説き始める。實際の瞑想法や修行道の説明は、第三瑜伽處の後半から始まり、第四瑜伽處の全體に續く。第三瑜伽處の前半は(前の二つの瑜伽處にも拘わらず)、また修行に必要な豫備知識や條件等が述べられる。

この第三瑜伽處と第四瑜伽處は、原『聲聞地』(Proto-Śrāvakabhūmi)と看

做した方が妥当なのではないか、と私は憶測している。尙、第三・第四瑜伽處には、後の編纂の跡おぼしき箇所も見られ、原『聲聞地』は、恐らく現存の第三・第四瑜伽處とは全く同じ文ではなかつただろうと考えられる。しかし、第三・第四瑜伽處の重要な教理や実践方法などは、原『聲聞地』の内容を反映していると見て良からう。後の増大や改定、即ち現存の初瑜伽處・第二瑜伽處及び第三・第四瑜伽處の一部の編纂箇所は、恐らく二つの理由から生じたと思われる。(1) 原『聲聞地』の一部の概念や教理的背景の説明が不充分と判断され、更に詳しい解説が付け加えられた。(2) この増大改訂の過程につれ、『聲聞地』は、比較的簡潔な瞑想法のマニュアルから、聲聞乗の修行道の総合的な論書という性格を次第に帯びるようになった。要するに、元々説かれていた瞑想法や豫備段階、前提となる概念の説明等とは密接な関係が無くとも、『聲聞地』の背景に在った瑜伽師たちの修行道論関連の範疇や諸々の教義、解釋などが續々と加えられるようになったのだろう。

『聲聞地』を著し、編纂した瑜伽師の（一つ或いは複数の）グループが（根本）説一切有部と密接な関係が有った事は、その全體の教理と修行道の枠組みに反映されている。しかし、『聲聞地』の思想には、説一切有部、特に『大毘婆沙論』の教理體系だけでは説明し得ない部分も認められる。獨特と思われる解釋や理解の中には、比喩師（Dārṣāntika）・經量部（Sautrāntika）に類似しているものも有るが、これらも凡ては比喩師・經量部の現存資料とは完全に一致しているわけではない<sup>(12)</sup>。

ここでは、成立が最も古いと考えられる第四瑜伽處に見える三つの関連箇所を紹介したいと思う。

- ① サンスクリット文（MS 114a7L; Sh p. 442, l. 14; Choi 2001, p. 169, § 25.0.; Deleanu 2006, p. 322, § 3.28.2.1.2.7.）<sup>(13)</sup> kṣudduḥkḥapatikārāya bhōjanam. śītoṣṇaduḥkḥapatighātāya hrikopīnapratichhādanāya<sup>(14)</sup> ca vastraṃ. nidrāklamaduḥkḥapatighātāya ca śayanāsanam, caṅkramasthānaduḥkḥapatighātāya ca. vyādhiduḥkḥapatighātāya ca glānapratyayabhaisajyam,<sup>(15)</sup> iti duḥkḥapatikārabhūtā ete kāmāḥ, iti naite raktēna paribhoktavyāḥ, na saktēna, nānyatra

vyādhigrastenevāturaṇa<sup>(16)</sup> vyādhimātropaśamāya bhaiṣajyam.

チベット語譯 (P Wi 200a6; G Wi 238b6; N Wi 177b5; D Dzi 166a5; C Dzi 172a4; ZT vol. 73, p. 411, l. 15; Choi 2001, p. 202, § 25.0.; Deleanu 2006, p. 365, § 3.28.2.1.2.7.) bkres pa'i sdug bsngal sel ba ni kha zas yin no || grang ba'i sdug bsngal sel ba dang|ngo tsha ba'i gnas pa car gyis g.yogs<sup>(17)</sup> pa ni gos yin no || gnyid kyi snyom<sup>(18)</sup> pa'i sdug bsngal sel<sup>(19)</sup> ba dang|'chag<sup>(20)</sup> pa dang|sdod pa'i sdug bsngal sel ba ni mal cha dang|<sup>(21)</sup> stan yin no || <sup>(22)</sup> nad kyi sdug bsngal sel ba ni na ba'i gsos sman yin te|de ltar 'dod pa 'di dag ni sdug bsngal sel bar byed pa tсам du zad pas|'di dag la chags pas yongs su longs spyad par mi bya zhing zhen pas kyang ma yin te|nad kiyis btab pa'i nad pas nad zhi bar bya ba tсам gyi phyir sman bsten pa<sup>(23)</sup> lta bu yin pas|

漢譯 (T 30.466a29; ZC 27.664c14; Deleanu 2006, p. 417, § 3.28.2.1.2.7.) 食能對治諸飢渴苦。衣能對治諸寒熱苦，及能覆蔽可慚羞處。臥具能治諸勞睡苦，及能對治經行住苦。病緣醫藥能治病苦。是故諸欲唯能對治隨所生起種種苦惱。不應染著而受用之，唯應正念。譬如重病所逼切人，爲除病故，服雜穢藥。

ここでは、心地よさ (*sukha*) という個別範疇の存在が否定されているようである。この如き見解は、比喩師・經量部のものとされており、『俱舍論』(*Abhidharmakośabhāṣya*) では、世親 (Vasubandhu) 自身もこの主張を辯論している<sup>(24)</sup>。尙、馬鳴 (Aśvaghōṣa) の『ブッダチャリタ』(*Buddhacarita*) と『サウンダラナンダ』(*Saundarananda*) にも同じ説が見える。それどころか、『ブッダチャリタ』の文章は、『聲聞地』のそれと酷似している<sup>(25)</sup>。『ブッダチャリタ』の文は、『聲聞地』の著者または編纂者によって恐らく参考にされたか、或いは少なくとも共通の傳統の存在を示唆している<sup>(26)</sup>。

- ② サンスクリット文 (MS 115b4L; Sh p. 448, l. 8; Wayman p. 127, l. 37; Deleanu 2006, p. 329, § 3.28.2.2.2.) tadanubandhānucārī vyagracāry evālbane<sup>(27)</sup> sūkṣmataro manojalpo<sup>(28)</sup> vicārah.

『聲聞地』の成立とその背景（デレアヌ）

チベット語譯（P Wi 203a3; G Wi 242a5; N Wi 180a5; D Dzi 168b2; C Dzi 174b2; ZT vol. 73, p. , 417, l. 17; Deleanu 2006, p. 373, § 3.28.2.2.2.）  
dmigs pa la mi brtan par spyod pa de dang 'brel ba'i rjes su spyod  
pa'i yid la rjod<sup>(29)</sup> pa shin tu phra ba gang yin pa de ni dpyod pa  
zhes bya ste|

漢譯（T 30.467a25; ZC 27.666a17; Deleanu 2006, p. 423, § 3.28.2.2.2.）即  
於彼緣隨彼而起，隨彼而行，徐歷行境，細意言性是名爲伺。

『聲聞地』のこの箇所によれば、「細かい観察」(*vicāra*)は、「それ〔即ち、大まかな観察、*vitarka*〕と結びつき、〔それに〕續く」(*tadanubandhānucāri*)と定義されている。つまり、「細かい観察」が「大まかな観察」に續いて起きる心理作用として理解されているようである。尙、同じ文章や他の関連箇所にて、*vitarka* という名詞の複數形が使用されている事からもすれば、恐らく『聲聞地』では、*vitarka* と *vicāra* とが基本的に同じ心理過程での異なった段階と見られていたのだろう<sup>(30)</sup>。この具體的な關係を詳しく論じる箇所は『聲聞地』には見当たらないが、もし私の解釋が正しければ、*vitarka* と *vicāra* は冥想對象等を觀察するという過程での異なった段階であり、相次いで起きる心理作用という事になる。これは、『俱舍論』において經量部に託されている立場とほぼ同じと考えられる。經量部に據れば、*vitarka* と *vicāra* が「言語を引き起こす要素」(*saṃskāra*)<sup>(31)</sup>の異なる段階であり、同時には起こり得ないもののであるのに対して、說一切有部の毘婆沙師たち (Vaibhāṣika) は、*vitarka* と *vicāra* が同じ瞬間にて同時に作用できると考えていた<sup>(32)</sup>。世親自身は、『俱舍論』で自らの考えを明言してはいないが、恐らく經量部の見解を擁護していると思われる。

- ③ サンスクリット文 (MS 116a4M; Sh 450, 11; Sakuma 1990, vol. 2, p. 29, § H.1.5; Deleanu 2006, p. 331, § 3.28.3.1.5.) *ipsitābhilaṣītārthasam-prāpṭeḥ*,<sup>(33)</sup> *prītau cādoṣadarśanāt*,<sup>(34)</sup> *sarvadauṣṭhulyāpagamāc ca vipulaprasrabdhicittakāyakarmaṇyatayā pritisukham*.

チベット語譯（P Wi 204a6; G Wi 243b4; N Wi 181a5; D Dzi 169b1; C Dzi 175b1; ZT vol. 420, l. 6; Sakuma 1990, vol. 2, p. 67, § H.1.5.; Deleanu

2006, p. 378, § 3.28.3.1.5.) *dga' ba dang bde ba can zhes bya ba de ni 'dod pa dang re ba'i don thob cing dga' ba la skyon du mi lta ba'i phyir dang|gnas ngan len thams cad dang bral<sup>(35)</sup> zhing|sems dang lus las su rung ba rgya chen po dang ldan pas na<sup>(36)</sup> |dga' ba dang bde ba can zhes bya'o ||*

漢譯 (T 467c2; ZC 666c12; Sakuma 1990, vol. 2, p. 88, § H.1.5.; Deleanu 2006, p. 426, § 3.28.3.1.5.) 言“喜樂”者謂：已獲得所希求義，及於喜中未見過失，一切龐重已除遣故，及已獲得廣大輕安，身心調暢，有堪能故，說名：“喜樂”。

この箇所は、初禪 (*prathamam dhyānam*) の定型句に對する注釋の中に有る。ここでは、「心地よさ」(*sukha*) と「輕やかさ」(*praśrabdhi*) が同一視され、「身體的な輕やかさ」及び「精神的な輕やかさ」の可能性も認められていると見て良い。*sukha* と *praśrabdhi* の斯かる理解は、確かに『俱舍論』のそれと近似しているが、一方、禪定における「心地よさ」の心理的な定義に關しては、相違が見られる。世親は、說一切有部のアビダルマの見解より、「他の人」(*apare*) の說として紹介している意見を容認している<sup>(37)</sup>。稱友 (Yaśomitra) に據れば、ここでは *apare* は「比喻師」(*Dārṣṭāntika*) を指している<sup>(38)</sup>。禪定における「身體的な心地よさ」の可能性を否定し、「精神的な心地よさ」のみを認めている毘婆沙師とは異なり、比喻師は、初禪から第三禪に至るまで、「精神的な心地よさ」は存在し得ないと主張している。しかし、その一方で、比喻師たちは、「身體的な輕やかさ」及び「精神的な輕やかさ」の可能性を肯定しながら、「心地よさ」と「輕やかさ」を同様のものとは見ていなかったようである。この點に關しては、*sukha* と *praśrabdhi* とを同一視している『聲聞地』とは違う立場になる。結局、ここでは、『聲聞地』は說一切有部とも比喻師とも異なった見解を提示している事になる<sup>(39)</sup>。

これらの箇所を見ると、『聲聞地』の思想は、完全に（根本）說一切有部とは一致せず、また現存の資料に傳わる比喻師・經量部に近似の理解を示しながら、それとも部分的に異なった解釋をも見せている。

参考文献及び略語

- AKBh: P. Pradhan, ed. 1975. *Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu*. Patna: K.P. Jayaswal.
- C: Co-ne *bsTan 'gyur*. Consulted after the microfiche reproduction of the *Co-ne bsTan 'gyur* made available by the Institute for Advanced Studies of World Religions (New York) and stored at the International College for Postgraduate Studies Library (Tokyo).
- Choi, Jong-Nam, ed. and tr. 2001. *Die dreifache Schulung (Śikṣā) in der frühen Yogācāra-Schule: Der 7. Band des Hsien-yang shēng-chiao lun*. Stuttgart: Franz Steiner Verlag.
- D: sDe-dge Canon. Facsimile reproductions:
1. D-Tokyo: Takasaki, Jikidō 高崎直道, Zuihō Yamaguchi 山口瑞鳳, and Noriaki Hakamaya 袴谷憲昭, eds. 1980. *sDe dge Tibetan Tripiṭaka bsTan ḥgyur* – preserved at the Faculty of Letters University of Tokyo デルゲ版チベット大藏經 論疎部. Tokyo: Sekai seiten kankō kyōkai.
  1. D-Taipai: A.W. Barber, editor-in-chief. 1991. *The Tibetan Tripiṭaka* 西藏大藏經. Taipei Edition 臺北版. Taipei: SMC Publishing Inc.
  2. D-TBRC: Tibetan Buddhist Resource Center. *Bstan 'gyur sde dge'i par ma: Commentaries on the Buddha's Word by Indian Masters* (CD-ROM). New York: The Tibetan Buddhist Resource Center.
- Deleanu, Florin. 1997. 'A Preliminary Study of An Shigao's 安世高 Translation of the *Yogācārabhūmi* 道地經'. *Kansai ika daigaku kyōyōbu kiyō* 關西醫科大學教養部紀要 17: 33–52.
- Deleanu, Florin. 2006. *The Chapter on the Mundane Path (Laukikamārga) in the Śrāvakabhūmi: A Trilingual Edition (Sanskrit, Tibetan, Chinese), Annotated Translation, and Introductory Study*. Tokyo: The International Institute of Buddhist Studies.
- Demiéville, Paul. 1954. 'La *Yogācārabhūmi* de Saṅgharakṣa'. *Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient* XLIV (2): 339–436.
- Frauwallner, Erich. 1969. *Die Philosophie des Buddhismus*. 3<sup>rd</sup> revised ed. Berlin: Akademie-Verlag.
- G: dGa'-Idan (or Golden) *bsTan 'gyur*. Facsimile reproduction:  
Prepared for publication by China Library of Nationalities 中國民族圖書館整理. 1988. *bsTan 'gyur* 丹珠爾. Tianjin: Tianjin Guji Chubanshe.
- Honjō Yoshifumi 本庄良文. 1987. 'Memyō-shi no naka no kyōryō-bu setsu' 馬鳴詩のなかの經量部説. *Indogaku bukkyōgaku kenkyū* 印度學佛教學研究. 36 (1): 390–395.

- Jaini, Padmanabh S. ed. 1977. *Abhidharmadīpa with Vibhāṣāprabhāvṛtti: Critically Edited with Notes and Introduction*. Patna: Kashi Prasad Jayaswal Research Institute.
- Johnston, E. H., ed. and tr. [1936] 1995. *Aśvaghōṣa's Buddhacarita or Acts of the Buddha*. Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers Pvt Ltd.
- MS: Joint Publication of Taishō University (Tokyo) and China Library of Nationalities (Beijing). 1994. *Facsimile Edition of the "Śrāvākabhūmi" Sanskrit Palm-leaf Manuscript* 瑜伽師地論聲聞地梵文原文影印本. Beijing: Minzu chubanshe.
- N: sNar-thang *bsTan 'gyur*. Consulted after
1. Photocopies made from the microfiches stored at the Library of the Institut für Kultur und Geschichte Indiens und Tibets, Hamburg University.
  2. Woodblock print of the sNar Thang *bsTan 'Gyur*, recently released in India (n.d.), stored at the International College of Postgraduate Buddhist Studies Library.
- Nishi Giyū 西義雄. 1975. *Abidatsuma bukkū no kenkyū: Sono shinsō to shimei* 阿毘達磨佛教の研究—その真相と使命—. Tokyo: Kokusho Kankōkai.
- P: Peking Canon. Facsimile reproduction:  
Suzuki, Daisetz T. ed. 1955–1958. *The Tibetan Tripitaka, Peking Edition, Reprinted under the Supervision of the Otani University, Kyoto*. Tokyo and Kyoto: Tibetan Tripiṭaka Research Institute.
- Sakuma, Hidenori S. 1990. *Die Āśrayaparivṛitti-Theorie in der Yogācārabhūmi*. 2 vols. Stuttgart: Franz Steiner Verlag.
- Schmithausen, Lambert. 1969. 'Zur Literaturgeschichte der älteren Yogācāra-Schule'. *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*. Supplementa I.3: 811–823.
- Schmithausen, Lambert 1987. *Ālayavijñāna: On the Origin and the Early Development of a Central Concept of Yogācāra Philosophy*. Tokyo: The International Institute for Buddhist Studies.
- Schmithausen, Lambert. 2000. 'On Three Yogācārabhūmi Passages Mentioning the Three Svabhāvas or Lakṣaṇas'. In Jonathan Silk, ed. *Wisdom, Comapssion, and the Search for Understanding: The Buddhist Studies Legacy of Gadjin M. Nagao*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Sh: Karuneshā Shukla, ed. 1973. *Śrāvākabhūmi of Ācārya Asaṅga*. Patna: K.P. Jayaswal.
- Silk, Jonathan. 2000. 'The Yogācāra Bhikṣu'. In Jonathan Silk, ed. *Wisdom, Comapssion, and the Search for Understanding: The Buddhist Studies Legacy of Gadjin*



『聲聞地』の成立とその背景（デレアナ）

M. Nagao. Honolulu: University of Hawai'i Press.

Suguro Shinjō 勝呂信静. 1989. *Shoki yuishiki shisō no kenkyū* 初期唯識思想の研究.

Tokyo: Shunjūsha.

T: Takakusu Junjirō 高楠順次郎 and Watanabe Kaikyō 渡邊海旭, chief eds., *Taishō shinshu daizōkyō* 大正新修大藏經. [1922-1933] 1991. 85 volumes. Tokyo: Taishō shinshu daizōkyō kankōkai.

Vetter, Tilmann. 2000. *The 'Kandha Passages' in the Vinaya-piṭaka and the Four Main Nikāyas*. Vienna: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.

Wayman, Alex. 1961. *Analysis of the Śrāvaka-bhūmi Manuscript*. Berkeley: University of California Press.

Wogihara, U. ed. [1936] 1989. *Sphutārthā Abhidharmakośavyākhyā: The Work of Yaśomitra*. Tokyo: Sankibo Buddhist Book Store.

Yamabe, Nobuyoshi. 2003. 'On the School Affiliation of Aśvaghōṣa: "Sautrāntika" or "Yogācāra"?. *Journal of the International Association of Buddhist Studies* 26 (2): 225-254.

Yokoyama Kōitsu 横山紘一. 1976. *Yuishiki shisō nyūmon* 唯識思想入門. Tokyo: Daisan bunmei-sha.

ZC: Zhonghua Canon (Chinese Texts).

*Zhonghua Canon* Editing Bureau 《中華大藏經》編輯局, ed., *Zhonghua dazangjing (Henwen bufen)* 中華大藏經 (漢文部分). 106 vols. 1984-1996. Beijing: Zhonghua shuju chuban.

ZT: Zhonghua Canon (Tibetan Texts).

*Tripitaka* Collation Bureau of China Tibetology Centre 中国藏学研究中心《大藏经》对勘局, ed. 1994-. *Zhonghua dazangjing Danzhuer (duikanben) (zangwen)*. 中华大藏经 丹珠尔 (对勘本)(藏文). Beijing: Zhongguo zangxue chubanshe.

注

(1) 法相宗では、『瑜伽師地論』は、「六經十一論」の一つとして挙げられている (Yokoyama 1976, 74 参照)。

(2) 詳しくは、Suguro 1989, 94-125 参照。

(3) 『瑜伽師地論』の成立及び研究史については、拙論 Deleanu 2006, 147ff. にて詳しく考察している。

(4) 『聲聞地』の梵文寫本は一つしか現存していない。幸いに、その影印版 (以下、MS) は、大正大學のご盡力により出版されている。寫本そのものは良い状態で保存されているが、その文章は理解不可能や亂れている箇所 (textual corruptions) が少なくない。寫本と Shukla の完全版以外は、大正大學の聲聞地研究會による版をはじめ、幾つかの勝れた部分的な校訂版がある。

- 『聲聞地』の寫本の歴史やその校訂版、研究の現状等については、Deleanu 2006, 51ff. 参照。現存の漢譯は、玄奘によって 646 年—648 年の間になされた (Deleanu 2006, 106ff. 参照)。Jinamitra、Ye-shes-sde 等が『瑜伽師地論』を九世紀初頭にチベット語に譯した (Deleanu 2006, 73ff. 参照)。
- (5) 竺法護譯『修行道地經』よりも前に、二世紀半ばころ、安世高によって『道地經』という抄譯がなされている (Demiéville 1954; Deleanu 1997 等参照)。
- (6) 「偷迦遮復彌經、晉名：修行道地」(T 15.181c)；「庾伽遮羅浮迷、譯言：修行道地」(T 15.301b22) 参照。
- (7) 『修行道地經』に據れば、凡夫が禪の靜寂さを求める主な理由は、神通力を得る事に有るのに對して、佛弟子の目的は、聖位に至る四善根の修行に在る。「何謂凡夫而求寂然？欲令心止住，除五陰蓋。何故欲除諸蓋之患？欲獲第一禪定故。何故欲求第一之禪？欲得五通。何謂佛弟子欲求寂然？所以求者欲得溫和。何故求溫和？欲致頂法。見五陰空悉皆非我所，是謂頂法。何故求頂法？以見四諦順向法忍。何故順求法忍？欲得世間最上之法。何故求世最上之法？欲知諸法悉皆爲苦。(T15.217a3-10) (この箇所、また以下引用している漢譯の句讀點は、現代の中國語に準じて、私が付けたものである。)
- (8) Sarvāstivāda と Mūla-Sarvāstivāda との具體的な關係については、議論が分かれている (Deleanu 2006, p. 215, n. 70 参照)。
- (9) 實は、カシミール地方の説一切有部の最も權威ある論書『大毘婆沙論』(\**Abhidharmamahāvibhāṣāśāstra*) では、140 ヶ所において「瑜伽師」(\**yogācāra*、\**yogācārya*) の意見が正しい解釋或いは參考に値すべきものとして言及されている (Nishi 1975 参照)。佛典における *yogācāra* の意味については、Silk 2000 参照。
- (10) 詳しくは、Deleanu 2006, 147-153.
- (11) 『聲聞地』は、所謂二重構造を有している (Deleanu 2006, p. 36, n. 18 参照)。大體の構成は以下の通りである。{ } 内は、ごく大まかな内容を記し、私が補ったものである。

**Yogasthāna** 瑜伽處

*Prathamam yogāsthānam* 初瑜伽處  
 {修行道の豫備知識、  
 補特伽羅の類別、資糧等}

**Bhūmi** 地

*Gotrabhūmi* 種姓地  
*Avatārabhūmi* 趣入地  
*Naiṣkramyabhūmi* 出離地

(註) 「出離地」は「第四瑜伽處」の最後まで續く)

*Dvitiyam yogāsthānam* 第二瑜伽處

{關連範疇や補特伽羅の類別等の解説}

*Trtīyam yogāsthānam* 第三瑜伽處

{初修業者、心一境性、淨障、修作意等}

*Caturtham yogāsthānam* 第四瑜伽處

{世間道、出世道}

『聲聞地』の成立とその背景（デアヌ）

- (12) 比喩師 (Dārṣṭāntika)・經量部 (Sautrāntika) は、全く同じ部派を指しているのか、それとも異なった傳統であるかについては、様々な憶測がなされている (Deleanu 2006, 214–215, n. 69 参照)。
- (13) 異讀や校訂の根據等については、Deleanu 2006 のそれぞれの校訂文の注記にて詳しく論じられている。
- (14) MS, Sh: *koṣana*.
- (15) MS, Sh: *glānabhaisajyam*.
- (16) Sh: °*grastenaiva*°.
- (17) P, G, N: *char gyi g.yog*.
- (18) N, D, C, ZT: *snyoms*.
- (19) P, G, N omit: *sel*.
- (20) D, C, ZT: *chags*.
- (21) D, C, ZT omit: |.
- (22) C: |.
- (23) D, C, ZT: *sman pa bsten pa*.
- (24) AKBh p. 330, ll. 9ff. 参照。
- (25) Aśvagoṣa, *Buddhacarita*, Canto XI, verses 36–39 (Johnston ed., pp. 120–121):  
Kāmās tu bhogā iti yan matiḥ syād bhogā na kecit pariṅāyamānāḥ |  
Vastrādayo dravyaguṇā hi loke duykhpratīkāra itī pradhāryāḥ || 36 ||  
Iṣṭam hi tarṣaprasāmāya toyam kṣunnāśahetoraśanam tathaiiva |  
Vātātapāmbvāvaraṇāya veśma kaupīnāśītāvaraṇāya vāsaḥ || 37 ||  
Nīdrāvīghātāya tathaiiva śayyā yānam tathādhvaśramanāśanāya |  
Tathāśanam sthānavinodanāya snānam mrjārogyabalāśrayāya || 38 ||  
Duḥkhpratīkāranimittabhūtās tasmāt prajānām viśayā na bhogāḥ |  
Aśnāmi bhogān itī ko 'bhyupeyāt prājñāḥ pratīkāraavidhau pravrttaḥ || 39 ||
- (26) この類似は、本庄良文博士 (Honjō 1987, 392–394) と山部能直博士 (Yamabe 2003, 234–237) から指摘がなされている。詳しくは、Deleanu 2006, 501–502, n. 87 参照。
- (27) MS, Wayman: *vyagracārye cālambane*. Sh: *vyagracāry evālbane*.
- (28) Sh: *manojalpaḥ*.
- (29) N: *brjod*.
- (30) Deleanu 2006, p. 521, n. 141 参照。
- (31) *samskāra* のこの意味については、AKBh p. 61, l. 5 及び Vetter 2000, 36–37 参照。
- (32) AKBh p. 61, ll. 7–12; *ibid.* p. 439, ll. 19–21 参照。または、*Abhidharmadīpa*, Jaini ed. 1977, pp. 81–83 参照。
- (33) Sh: °*prāptaḥ*.
- (34) MS, Sh: *vādoṣadarśanāt*. Sakuma: *cādoṣadarśanāt*.

- (35) Sakuma: *brel.*
- (36) P, G, N omit: *na.*
- (37) AKBh p. 438, l. 18 – p. 440, l. 8 参照。
- (38) *Abhidharmakośavyākhyā*, Wogihara ed., pp. 673–676 参照。
- (39) 詳しくは、Deleanu 2006, pp. 532–533, n. 169, n. 170 参照。